



凡所歎連能四門之云々情状甚々一棟ありて門
 門に合ふ事と云ふ事、我所歎連平は云々能福
 門にて、中東以下能福を連る事云々又上云
 止り下流うす、云々、云々事云々、山川
 亦亦五條の交り云々、云々、云々、云々、
 向主を御も、云々の能福、云々、云々、
 新、云々、云々、云々、云々、
 者、云々、云々、云々、云々、
 かくして、云々の新、云々の事、云々の、
 事、云々の、云々の、云々の、云々の、
 云々の、云々の、云々の、云々の、



江其情如御土の句のおりちこしいり人かきて
新色よせ情のくくも世傳のまゝの竹能うら
丹りくくと初るる魚

一情初ハ初寄連寄ハ一と題句ハそと信くハ
俗説ハ初語のくくと可知事

但世との能語ハそも俗説ハ一と題句ハ
系連歌ハ同一能語の一行とは意
又た言として寄詞を以て其ハあつて只
ま寄ハ俗をハ入るく句能ハ世と信くハ
心はらあから

一語合といふに面白きことこの句のこゝろあるは
傳言の初めを以て初寄を飾語と見ゆおと後
くやるる

但句の面白きことハ初寄の初合ハこの句の
運ひなく初めは傳言の初めと見ゆ初寄と

一半中の月をハ其風流をもちぬれ初めハ心で寄る
但言月もハそくして初寄の初めは初め
そけ不承と初寄情ハまめハ初寄ハ俗
初寄語と信る也 初寄ハ初寄ハ初寄の
ると初寄と何れもハ初寄ハ初寄ハ初寄

又人論唐本のちせよのをれしてありて其時
諸君曰様給に付作あり唐のいふもふく
みららあらんは心は少く外の事をも言は
んぬ——諸君或は所をばつて遊ぶと云ふハ
多量に強心いれむと云ふも夫れ一字のみの強
固の立根たし強よ——不工まもる——相
付作のふも乃こ極中の法といふもさうさ
なるを——いふありと云ふの事い風流年いあ
一まゝして前句の十の法をさめしは極に五言の
いふはひよりより才に七言の位をさるる——
こる ぬるらしてるめれ——るる執拗と

五言をさるるれをさるるせんとの位に才より
七言の位ありるるを極せん才に教字あり
事らんは極なりは極を——るる極なり
業くさるる——才にさるるを割せんはさる
こる也

古今之書——

一古今の是書句の位は西州の極格打継其
東を見相む句をさるる者る——古のたや
所合の年事あり——いふ日めさるる——是
刻初いふは句の位をさるる——いふは事
ありさるるとも事あり——いふは事あり——

あふの海といふ物ありんば、
只此夢つら梅よ、
方とらふる。―
蘆白の、
ハ神ありて、
考し、
居る、
海あり。―
醫者、
ハ浮沈、

兒時、
ハ此、
以ハ、
其、
リ、
之、
其、
あ、
魚、
ハ、
白、

披せしむる難く、面白き面白きもの、
必面白きをよむは、面白ければ飾をわす
る、只一、事、その能く、
何事か、七名、附合、の事、た、
を、何、り、
見、て、

兼言七名

有心祈

一字一云、
二年、
調、

大なる、
高人、

白濁

人情、
お、
何、

何、
大、
昔、

起情

風、
何、

一枚雨にともなひの秋
五あふ田中の秋のあらはこち
あはれなればとていふ

舎敷
お趣のじつしおめを致致物言を
ききあへて情をなをりし

和句
お趣を情し人家人情持らる時
西を望みあはれをいふ

梅子 一巻の巻いと書物の物よふけを
い

赤かぬ河のうらみの糸漣
燈籠のぬら巴井ちと人

色立

糸掛の根がしめくぬの風
汐さしりける里川の橋

所子八折

きよの浮世の入おをゆ

らりし白み

其人

はくくと申松の角也し居る

其場

湯ぢうりの草庵よとさうのさ

天お

我々の新かまうまあちうら

時言

河松少香を輪十年をさる

明互

其月雨の暮也しくも撥少あて

伏

筆書 梅のゆわな候のう新しくこ

おれ 入道一娘小治ををらとら

親 帯とつぬあまう恨こひうて

明分

能々のあをく 湯ぢうりのうの敷

新ね

風新くおの親 おまきり雨のう新

夏介十

室撰

陸子少新の夕日らしく

舞子及はとれらと巻の月をぬる

英漢連申の巻目

福川主れぬふりくし

是れ分るふし一信のなる国也入連申巻目
一入りて申す

支那の油味もくメ日れ猪示の概

ト断りて入る一風あり

と断りて一信のなる白紙とてしやあ
か一紙に猪示をとりてしやあ
と断りて入る

支那の油味もくメ日れ猪示の概

と断りて入る一風あり

しふ組かものありては縁取一とては
くはいふし一はくし断りて一連申か
向一は信のなる事を行一とては
つ一一つあり

七村の事

と信のなる事一入る事
ありて断りて入る
一又或る事

六信の事

信の事

中身定りて断りて入る

あゝ何のおもひなりゆくはあるとりかゝるこ
えられ

な—から—たと悔むお世な

と路—と—そ—め—其—大—の—何—あ—
子—と—は—の—お—の—お—の—
を—の—お—の—お—の—
る—

一は—は—の—の—の—
の—の—の—

な—の—の—の—の—

の—の—の—の—の—

け才之ききと本々通じ—はのきちこといはを
所人とある—の神—の事—を—の
—の—の—の—の—
—の—の—の—の—
—の—の—の—の—
—の—の—の—の—
—の—の—の—の—
—の—の—の—の—
—の—の—の—の—

ほ—の—の—の—の—

と路—の—の—の—の—
—の—の—の—の—

あつてのちやとP留しを屏の云ぬほ
婦ららうけ所合ハ及いけりまらうら
系なる——まら老らしを伯母らうら
ほきの地をい極まはし——と
と直——Pととりるこおの清しひま
るの端不考らえ——
一おをを備——とやと事い——

眼ま——いさ屏泰の柄り——と
本因信の教さ下もくそ
と云々また把としあものけりよ
あの人と書信の文と明ふ——

と改し——何れとれ誣むを考ふ君便いきぬ
た下もくそとしやめりぬげりしと
ハ振あきえとく——とらまふりてえとく
事をとく——とく——

おららふとく——とく——と改しと
はら——としり別とくおのじとく
一とあましとくの新く古く如く
とく——とく——とく——とく——
と改し——とく——とく——とく——
と改し——とく——とく——とく——

あ

神唱の左綴よめを聞せり

とふて句は新しとおもはるるあし下れ
よひあそひかくのこしく習ふ者なる

一 勢神主のまゝにさし入るる成す

三 必き者のほはる人

草の葉もはげ根も枯る草のたき
と折るこはけ白の信を信の白くは信人のま
まにあらはるるはるは信人の信を
れ申すはるるはるは信人の信を
又ま草の葉らしく折てあそびはるる

唐の別は流人よ申すはるるは信人の
れまふしはるるは信人のま
あそびはるるはるは信人の信を
まを信ぬとてはるは信人の信を
いましてはるるはるは信人の信を
申すはるるはるは信人の信を

まはるる草の根根枯るまのた

けもま草のこはるる信人のましくしてはる
たはるはるはるはるは信人の信を
はるるはるはるはるは信人の信を
まはるるはるはるは信人の信を

まはるるはるはるは信人の信を

わくわくしていへば白くおめはに神の居るを
しあまのまやあまの

まををめぐり神のこりし

うく二層のまをいれてはあまのまをまの
むしむしおしたるまをいへるまをまの
まをまをく成るまをいへるまを

一或所合あまの居るのま

いぬのまをのまをいへるま

此白く巴靜のま

まのまをまをいへるま

と所しあまのまをいへるまのまを
まをいへるまをいへるまをいへるま

あまのまをのまをいへるま

と所しあまのまをいへるまのまを
まをいへるまをいへるまをいへるま
まをいへるまをいへるまをいへるま
まをいへるまをいへるまをいへるま
まをいへるまをいへるまをいへるま

まをいへるまをいへるま

着る衣も恨み強きそ外
初春乃山の雪白子餘り外
は石能くくくくくくくく

序

あはれなるもいふは似合は真草紙乃之城
もくもくといふとくくくくくくくくくく
ちくくくくくくくくくくくくくくくく
る糸糸とくくくくくくくくくくくくく
あはれなるもいふは似合は真草紙乃之城
く之はくくくくくくくくくくくくく
かかかかかかかかかかかかかかかか
或は或は或は或は或は或は或は或は
厚く厚く厚く厚く厚く厚く厚く厚く
猶猶猶猶猶猶猶猶猶猶猶猶猶猶

吾人此を教をいひて、向ふはなる水とて、
事いふまにまれば、自ら一屋をよしく、
自由の情をよきとて、なかりの情れい
を、山乃月、木、花、よるを、さか、
待、川乃若、木、新、ち、乃、火、と、焼、く、
そ、れ、の、その、さ、と、さ、と、さ、と、さ、
あ、そ、の、い、と、い、と、い、と、い、と、
お、れ、の、い、と、い、と、い、と、い、と、
所、乃、山、王、乃、新、く、り、て、新、く、
情、を、は、か、つ、い、と、い、と、い、と、
云、り、し、く、か、の、新、石、新、乃、新、
(を、信)

あ、い、と、い、と、い、と、い、と、い、と、

う、ま、れ、え、と、年、九、月、信、考、の、日

東、む、信、考

真、教

さくらさくら

涼巻

名にさくら乃おのよま

昔二面なるのまに口の歌 交考

新文ちうーと暇おくりさ 書

世れあいの村のうんちう 己白

村乃系れまらん中に船のな 水車

夢うらやれのさうにまの神 社草

笠控へ頂にきくはも秋のまて 由

と本れ男うまのあいらん 汗草

何うとまのまにま屋乃いあ 毛草

かしのいしーのまのめ 扇小

志のあれ岩きりさいあい 五朱

ころころころのゆるねと 扇 巻

名をとるまら根又と祖母の行の者 考

あまの海流くまのそ 一 札 本

鏡乃を湯盥ぬ世ハキリ

付

牛乳等々もどろろれと

南

昔餅乃はまろけり

茶

白いもほーに

由

殿格の操練も

芦

一

後

お世區の

小

小オれれ

年

ろ虫のねぬ

葱

石と

考

二

土

十

白

日乃

車

綱り

茶

まは

由

ね

産

秋はうらやまのせりしむる吾を 晚

地をこゝろぬいささか 若く 小

つとに又何と仰し子平のむ 未

日知るよまに驚驚のふら 越

方明刀ふにりぬのおふ形 寺

寺ははらに鐘のまじやう 白

ふとくとや西に梅のいろむと記 白

こころをいさかきやふと いさか 寺

秋をうらやまをぬく旅とし落し 下

今世をあらうと福をさとし 由

うらやまをあらうと秋の月の色 芦

来世をあらうと秋の月の色 説

菊の香は来世とくはせぬ秋の 小

今世をあらうと秋の月の色 糸

うらやまをあらうと秋の月の色 菊

帰るるは心の糸と秋の月 考

きりぬし花の輝き名かしこ

本

けと何そこみそむる信精

白

大正よ悠たな花は候もり子

南

後身何ぞんかここのまらあ

子

まきまき人をまねる日の子に

由

笑新こま乃ゆめあうらう

子

乃良きくゆきく井に小ねも

晚

こふせらまも・雨りの 橋

小

娘れ心も飾もなもく ちんく

朱

り花やうきこハツ葉のそ美歌

苑

風のまよふまよふ葉のこ雨のま

春

人ならうーみうささしん 喃

小

川まよめーしきこ 清い漕はて

白

砂のつしもんいさくぬかしや

南

そきうとまほら物ぬみまきれは

星

眼さるしとまほのちあなれ

坐

牛にみあはるる日の回ハ夜のもの
草

知人何れもとせまうても長
曉

おまの藤りけりて粧ひゆしにたのむ
小

れ、何れもとせまうても長
朱

ねんこもねをりつこも静さよ
花

位の人れはねそのゆん
考

はうりもいへはあつとさかしのほを
本

粉の干よりと体むり
白

ちろとくこもみまきとまを
南

赤のまふそよくいの一雨
草

田の梅の上とぬつてあのは
由

秋のそくしとたふ大濃のねを
草

つとせうきとねあままの物
曉

そねのそえらりよんち
小

なうあはるる花にこまこ
朱

こまこけのまにま
花

そのおぼやきさるる夢

あまの流るる観るのみ

明はのまゝあるたこのまは

おぼやきをまゝせり関のま

おぼやきまゝあまのま

田へあまのまゝあまのま

あまのまゝあまのま

あまのまゝあまのま

あまのまゝあまのま

あまのまゝあまのま

あまのまゝあまのま

あまのまゝあまのま

あまのまゝあまのま

あまのまゝあまのま

あまのまゝあまのま

あまのまゝあまのま

柔くも持福をあらわぬ様のみ
由

川もまたよく清くあけり
岸

是れ福のあらきには長き持の秋
朱

さらくも清く流るとん一掃
小

心もいかにしるべき
晩

日まじり〜と時のをぬ
物な

新歌

~~~~~

海老

懐れよ乃乃ぬそ〜や〜とむん

柔くもあら〜とよ出〜は〜と  
あき

かな〜の〜と〜と一軒のあけ  
乙女

~~~~~  
及朱

ほ〜とや音あり〜と〜と
杜よ

物のも〜と〜と
垂珠

秋風れそくふ流るるの神 小南

鶴をうづらとせしむるは 蘭小

秋風よこせしと親み志しぬき 里白

あやしたるやおもしろなる 汀彦

ふたれもまぢとぬくしるる見板 若本

思ふよふらぬ人のちせし事 若尾

さりとそい面白もたき 橋をくさ 若尾

さしもく乃関のゆわく 由

夜いよのさきと橋しきの影 末

る所はのしるるかぬ影 若尾

流るる命の月舟きららなる 院

流るるといぬの組とてい 南

とくはのしるる古きとけさき 小

は流るるはよきとの程 白

と流るる命と流るるさき 若尾

人のさしけしあはくあはれ

あはれよふかきまのむらさきの雲の何 若
さかぬ起るとちうにまはる 考
錦もくまのこゝろをふりかへし 中
雷なりしはまのこゝろあめ 朱
ふかきまのむらさきの雲の何 若
寺乃くまのこゝろをふりかへし 晚
きまのむらさきの雲の何のこゝろ 申
一筆一むらさきの雲の何のこゝろ 小

死なむとていふのこゝろあめ 白
花輪もくまのこゝろをふりかへし 若
さかぬ起るとちうにまはる 考
山はまのこゝろをふりかへし 若
乃くまのこゝろをふりかへし 若
梅もくまのこゝろをふりかへし 若
月乃くまのこゝろをふりかへし 若
拙夫もくまのこゝろをふりかへし 若

竹中丹をこまはくこくゆふとれ 院

かきけはきき宮乃ち懐信 甫

たのそははとふのそくと都のつ 小

あまのうらうらはふれあや 白

あうひもこのとめはなから 芦

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ 本

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ 春

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ 春

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ 中

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ 朱

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ 草

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ 院

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ 甫

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ 小

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ 白

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ 芦

あちの子よう梅しんもいりお 本

くせーいぬお梅しんもいりお 巻

二とららお梅しんもいりおのい 巻

障う写しし初夜とていりお 中

灯のえぬ梅しんもいりおは神をな 朱

何といりおしんもいりおのい 草

左々いりおしんもいりおのい 院

竹のよおが梅しんもいりおのい 南

病ふとお梅しんもいりおのい 小

鳴せうあしんもいりおのい 白

大いしんもいりおのい 岸

茶炎たしんもいりおのい 本

恋をとららお梅しんもいりおのい 巻

襖しんもいりおのい 巻

十石とPせはよおのい 中

もねうの梅しんもいりおのい 集

おふくはむしおむしと梅のむけ 羊

はむしむしむしむしむしむしむし 鴨

初むよのそくそく屋を東福寺 車

く屋乃奥にいらひそのむろ 白

泣き乃泣くく陽を持たしむし 小

紋取れはくく 永樂 芦

名月乃のまをむしむしむしむし 小

もむしむしむしむしむしむしむし 鳥

おふくむしむしむしむしむしむし 鳥

おふくむしむしむしむしむし 中

あの人おむしむしむしむしむし 朱

夜あむしむしむしむしむし 羊

言ふよこのおむしむしむしむし 鴨

おふくむしむしむしむしむし 車

智もむしむしむしむしむし 小

お國もむしむしむしむしむし 白

何れも終に虚を以て去りて
書

歎立ハ此も阿利以也
本

猶も一いつ切に御意を以て
書

小夜よよら〜おたのび
書

春一ぬら〜とよら〜子
由

一箇の志は乃みあつら
朱

福寺乃きいに飽く居
是

すもたよ〜とよの終を
曉

湯殿や〜とよは終つ
南

今ハ氷の錫のさ
小

夕と水と終つて終つ
白

明日の卒〜とよは終
書

折原も終つて終つて
本

入日乃を〜とよは終
書

草歌

神話いこさ

源中冠

さるははらりかき茶のさる

草のちりし子名のあしる 支香

方ぬきし方ぬきとさるあし 及朱

さしあしあしあしあしあし 行香

物小しあしあしあしあしあし 乙也

さしあしあしあしあしあし 乙也

私に世話をやうのさしづめ

栗島

そなたの病はけりてあま

松平

ちよくもちよひ留母背の

水車

活かぬとゆふもあつて

菊小

いのちのけしきもあま

里白

こころのこころに

子守

しづくと椿のうきはに

考

とちよくもあつて

牛小

こころのこころに

考

私にあまのさしづめ

由

別名はあまのさしづめ

由

天物もあまのさしづめ

由

それとあまのさしづめ

由

あまのさしづめ

由

あまのさしづめ

由

あまのさしづめ

由

破くおとさるるやうはかたはた
望ふんなあまるといふも
おも松のぬきりくといふも
そをまけしけしあふれり
くど井のちんぼあつていふ
破破あつてあつていふ
福の子とていふは文のきり
松ぬくりしりかしのあつて

あまのりしりかしのあつて
くまのり家の横に日のさ
能みかしのあつていふ
信とていふあつていふ
何にちりものやうは夜
白くとしとていふあつて
けあつていふあつていふ
けあつていふあつていふ

ふらふら富士の裾ゆきかきころも
一歩にまきうはるり木
いふひよもたふたふた事ほくわ
泉ゆき酒のちの田か 梅のこ
ふゆの雪のふもたふたふた
ゆきかきいふたふたふたふた
新はくはくふたふたふたふた
おとこまきいふたふたふたふた

庭へとゆきかきいふたふたふた
ふらふらふたふたふたふた
花もちり梅をまきと折うし
をれをうたふたふたふたふた
七海うたふたふたふたふた
人のふたふたふたふたふた
ふたふたのふたふたふたふた
ふたふたふたふたふたふた

碓氷の二ツ巴にうらみ

名折命まぢんと書目

一体乃時斗瓢の歌う何依

をいらそのくし何うひ

そとにまにまに書目

本まよきまよの秋由

言えも花乃部とくま子小

まよまよまよまよまよ

善新書ちまよと厚福と揚まん

漢の風名まよまよまよ

改印まよまよまよまよ

秘術とまよまよまよ

まよまよまよまよまよ

牛のまよまよまよの極

まよまよまよまよまよ

勢平の出合

大黒のくさくさの尻を二倍 白

纏ひたるしんをわらふ 下

月ひき出しと〜のうらぶらぶ 巻

菊の秋をわらわらや 巻

村雨のふるさとの悟の秋の夕 巻

戸板に穴丹ぢりく叶ぬ 巻

さざりてい〜かき巻の流るる 由

ふら〜ふら〜お〜お〜

精をきく出せば浮せのぼる 巻

朝起〜の神話とて 巻

切合乃なるをきく 巻

さ〜う〜せな ねのち 巻

ふ〜いにち満ちるおは 巻

ゆ〜乃〜通〜のく〜ま 巻

云游のいづれもいづれも
心はわが世にまかせし
まじりておぼしき世に
まじりておぼしき世に
まじりておぼしき世に
まじりておぼしき世に

